



## ヒトツナギの旅～島根県隠岐島前海士町～

文/写真提供：畑尻 郷（近鉄インターナショナル シカゴ支店）  
 協力：近鉄インターナショナル シカゴ支店



1-800-654-4090

japandesk.CHI@kintetsu.com

www.kintetsu.com/jp/chi/

3月の初めまだ雪がちらつく頃、私は日本海を航行する船の中にいた。2等船室のじゅうたんはゴツゴツしてはいるが、フルフラット状態での船旅はなかなか快適だ。3月の日本海はまだ波が高い、ときおりぶつかる波が船にあると「ゴクン」という響きとともに船が揺れる。船室の窓から空を見上げると、今日は空が回っている状態。晴れたかと思うと、風が吹き、ときおり雪が散らつく。ぐるぐる回る天気は私は昔からそのように言っていた。このような状態のときは寒さが厳しい。東京では梅の花が満開になっていた。もう確実に春の足跡が聞こえてくる頃であるが、まだ日本海の春は遠い。しばらくするとゴクンゴクン揺れていた船がやたら静かになった。船内にふるさと訛りのアナウンスが響く。3時間の船旅であった。

今回私がやってきたのは島根県隠岐島前海士町（おきどうぜん・あまちょう）。昨年、秋口に島根県立島前高校のY先生からメールをもらった。「海士はいいですよ！是非いらしてください」そんなメールと一緒にきていたのは分厚い活動報告書。何かと思えばそれは「ヒトツナギの旅」と題してある。目を通してびっくり、それは高校生が主体となって企画した旅プランである。「おもしろい！これは行かなくては！」と私の旺盛な旅欲に火がついた。

島根県隠岐郡島前は島根県と鳥取県の境にある島根半島から北東に約60㎞にある群島である。日本海沖の隠岐諸島南西部にある西ノ島（西ノ島町）、中ノ島（海士町）、知夫里島（知夫村）の三島を島前（どうぜん）と呼ぶ。また島後水道を隔てた島後島（隠岐の島町）一島を島後（どうご）と呼ぶ。島後島の西郷町、布施村、五箇村、都万村の4つが2004年の合併により隠岐の島町となったから、隠岐の島ということと島後のこととられがちであるが、実際、隠岐の島という名の島はなく、島前、島後の4つの島をあわせて隠岐諸島（隠岐群島）と呼ぶのが正式である。

今回訪れる海士町は中ノ島にある。対

馬暖流の影響を受け、豊かな海と、名水百選（天川の水）にも選ばれた豊富な湧き水に恵まれ、自給自足のできる半農半漁の島である。面積33.52平方キロ、周囲は89.1キロの規模の島だ。歴史は古く、平城京跡から海士町の「干しあわび」が献上されていたことを示す木簡が発掘されるなど、古くから海産物の宝庫として「御食つ国（みけつくに）」に位置づけられていた。また遠流の島として遣唐副使の小野篁（おののたかむら 802年～853年）が3度目の派遣のときにこれを断り、配流されたり、承久の乱（1221年）で、ご配流の身となられた後鳥羽上皇は、在島19年余、中ノ島でご生涯を終えられた歴史がある。明治時代には文豪小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が隠岐を巡ったとき、最も気に入った場所として海士町菱浦港を著している（小説、知られざる日本の面影「伯耆から隠岐へ」より）

この海士町にある島前高校では「島前高校魅力化プロジェクト」というのがあり、このプロジェクトのひとつで、生徒たちが企画した観光ツアーが「ヒトツナギの旅」である。このツアーは全国高校生観光プランコンテスト「観光甲子園」で日本一（文部科学大臣賞）に選ばれた。高校生が目で、自分たちの島を見つめ、その魅力を最大限に引き出してあるすばらしいツアー内容である。

海士町の玄関口「キンニヤモニヤセンター」には観光案内所、レストラン、御土産物屋などが入っている。ここで島の観光手段はすべて手に入ると考えて良い。「そういえばまだ宿の予約をしていない…」というときも大丈夫だ。観光案内



所のスタッフが丁寧親切に民宿、旅館などの案内をしてくれる。2階には海士町名物、「さざえカレー」を出すお店「船渡来流亭」がある。「島じゃ常識…」とのことだが、多分本場、インドに行ってもないであろうこのご当地カレーは普通のシーフードカレーより濃厚な磯の香りとカレーの香辛料の香りが絶妙にマッチして、何よりもさざえの食感がカレーにあってしまうのがなぜか嬉しいのだ。

カレーに感動していると、メールを頂いたY先生が店にやってきた。非常に忙しいのに時間を割いて来ていただいた。感謝なことである。是非、この島前高校魅力化プロジェクトに携わるY先生にその詳細に大変興味があったので、色々お伺いしてみた。

「島前高校は島前の3つの島で唯一の高校なんです。ところが、少子化の影響を受け約10年間で入学者数が77人(1997年度)から28人(2008年度)に激減してしまいました。こうなると、全学年1クラスになり、統廃合の危機が迫ってきます。一番近い高校は島後ですが、島後までは島前から通うことはできません。つまり、この島の高校がなくなる、島の子供は、15歳で島外に出るを得なくなります。その仕送り等の保護者への金銭的負担は大きく（3年間で一人約450万円かかる）、出稼ぎなどの必要性も発生します。そうすると、人口が島外に流出してしまえば島の存続に直結するわけです。そこで島前高校魅力化プロジェクトが発足しました。全国からも生徒が集まる魅力的な高校づくりを推進しようというわけです。これにより島前高校は「島留学」ができる設備も整いました。寮や食事まで極上の環境で勉強できます。また夏には島の魅力を知ってもらおうと、『アドベンチャーキャンプ』も開いています。これは全国から7月の末の短期間に島を訪れるきっかけにもなりますし、そこで体験できたことは、一生の宝ともいえるべくプレゼントです！アメリカで暮らして



いる日本人の子供たちも気軽にご参加いただけますよ」

Y先生の熱い説明に聞き入ってしまった。すると、「是非こちらへ！」と手をひかれ、港の岸壁へと連れて行かれた。「これからうちの高校生がお客様をお見送ります。ごらんになってください」とのことだった。そこには制服姿の高校生がズラリ並んでいた。港には本土へ向かう船が出港前だ。紙テープを引き、高校生は応援団さながらに大声で島を去る観光客をお見送りするのである。船が汽笛を鳴らし、岸壁を離れ、本土に向かって出港するとき高校生は「わ～」と言って岸壁の端まで行き、船に向かって手を振る。なんか胸が熱くなった。「人が繋がることは大切なんです。紙テープは切れてしまうけど、こうやって見送ったり、見送られたお互いは絶対に心では繋がってますよね。そんな人がいつかまた引っ張り合って、ひとつの絆が島と本土の架け橋になるんです。町が変わっていくと思いますが、実際は人が町を変えていくんです。島でやっている地域づくり・まちづくりの原点は究極『人づくり』にあるんです。『モノづくり』と『人づくり』の両輪によって、はじめて持続可能な地域（まち）になると思うんです。是非海士町に関わってってください！Y先生の仰るとおり、いつまでも手を振り続ける高校生の手の先には間違いなく、いろんな人との目に見えない絆が結ばれていることであろう。そしてその絆はいつか必ず島を島でなくする原動力になると思ってやまない。